インド哲学仏教学研究 23, 2015. 3

Tattvasaṃgraha および *Tattvasaṃgrahapañjikā* 第 7 章第 6 節「犢子部が構想分別するアートマン（プドガラ）の考察」テキスト考

鄭　祥教

1　序説

インド仏教後期中観派を代表するシャーンラクシタ（Śāntarakṣita, 725-784 頃）作の『摂真実論』*Tattvasaṃgraha* (TS) および，その注釈書であるカマラシーラ (Kamalaśīla, 740-797 頃) 作の『摂真実論細疏』*Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) の第 7 章第 6 節（ = 第 336–349 偈）の “Vātsīputrīyaparikalpitātmaparīkṣā”「犢子部が構想分別するアートマンの考察」では，犢子部 (Vātsīputrīya) のプドガラ説 (Pudgalavāda)―いわゆる「人格主体論」―が批判される．

第 7 章は「アートマンの考察」という章題のもとに，ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ，ミーマーンサー，サーンキャ，ジャイナ教空衣派，ヴェーダーンタという諸学派が説くアートマンの考察に引き続き，第 6 節において仏教内部の犢子部のプドガラ説批判を展開する．

同節は，五蘊と同一とも別異とも語りえないと規定される犢子部のプドガラ説（第 336-337 偈）に対して，後期中観学派を代表するシャーンラクシタとカマラシーラの師弟が，ヴァスバンドゥ作『倶舎論』（*Abhidharmakośabhāṣya*, AKBh）第 9「アートマン論否定」(*ātmavādapratiṣedha*) 章（破我品）におけるプドガラ説批判をも踏まえ，ダルマキールティの論理（本質因による推理，非認識による否定推理，刹那滅論証等）を採用しながら批判的に詳論する（第 338–349 偈）．

同節におけるプドガラ説批判によれば，身体（rūpa）や感受（vedanā）などのように実在物 (vastu) であるなら五蘊と同一かあるいは別異であると語られるはずであるし，同一とも別異とも語られないとすれば実在ではなく，仮説としての存在（仮有 prajñaptisat）にすぎないことになるという．さらにまた，経典においてブッダが，身体と同一とも別異とも回答しなかった「生命」（jīva）や，「有情」（sattva）や「荷物（ = 五蘊）の担い手」（bhārahāra）などを述べたのも，虚無論を否定するための仮説であり，ブッダが「プドガラ（人）」の呼称を用いたのも五蘊の集合に対して仮説したにすぎない，というのが本節の大要である．

仏教内外の資料を駆使しながら詳論する本節は，『倶舎論』第 9 章とともに，プドガラ説の概要を伝える貴重な資料の一つである点でも重要であり，信頼に足る校訂テキストが不可欠であることは言を俟たない．それゆえ本稿は，Jesalmer と Pattan の両写本にもとづき，TS と TSP のテキストを上下に分けて提示する BBS 本（TS(P)B）の修訂を試み，その中の重要と目されるいくつかの訂正に関してそれぞれの論拠を提示し，考察を加えたい．

さて，TS および TSP 両テキストの現存するサンスクリット写本としてはいずれもジャイナ寺院に保存されている Jesalmer（TS(P)J）および Pattan（TS(P)P）写本の二種類があり[1]，この写本に基いて GOS 本（TS(P)G）と BBS 本（TS(P)B）との校訂テキストが出版

[1] 本考は Jesalmer（TS(P)J）および Pattan（TS(P)P）の両写本に基づいて，校訂テキストである BBS 本

された[2]．GOS 本は Pattan 写本に基づいて 1926 年に校訂出版されたが，その後 1968 年に出版された BBS 本は Jesalmer 写本を底本に，Pattan 写本と GOS 本，およびチベット語訳を参考して再校訂し，両写本と GOS 本との異読を注記している．

一方，ジャイナ教僧院書庫に保管されたこの両写本が，Jaina Muni Jambuvijaya 師と Jaina Muni Pundarikaratnavijaya 師の長年の尽力により，研究者にも利用可能となってきた．筆者は，Muni Jambuvijaya 師および Muni Pundarikaratnavijaya 師のもとに滞在した石田尚敬氏によりこの両写本の写真を提供され，プドガラ説批判の箇所を検討する機会を得た．その結果，両校訂本には再考すべきいくつかの箇所が残されていることを確認した．それゆえ本稿は，両校訂本の中でも，とくに Jesalmer と Pattan の両写本を参考して作成された TS(P)B におけるテキスト上の問題点を明らかにし，その修訂テキストを提示することに主眼を置くことにした．

TS(P)B の批判的検証に際しては，今回入手した両写本の写しと GOS 本，およびチベット語訳を用いた．一方，プドガラ説批判の箇所についての訳注研究には Schayer[1932] による独訳，Jha[1937] による TSP 全体の英訳，ならびに長澤 [1939]，内藤 [1985] による和訳がある．この中，内藤 [1985] は TS(P)B を底本とし TS(P)G とチベット語訳を比較した優れた訳注研究であるが，写本を参照していないことによる一定の限界もあった．とはいえ，内藤氏の論稿は精密な訳注研究であり，末尾では GOS 本とチベット語訳を根拠に，9 箇所についてのテキスト上の訂正を提起している．

2　修訂一覧

さて，プドガラ説批判の箇所に相当する TS(P) の第 7 章第 6 節（= 第 336〜349 偈）を，Jesalmer と Pattan の両写本，GOS と BBS の両校訂本，およびチベット語訳と TS(P) 本文中に引用された他の文献とを比較対照した結果，およそ 70 箇所余りに異読が存在するこ

（TS(P)B）の修訂を目標とする．両写本に関する以下の情報の概要は，塚本啓祥他 [1990: 450–451] による．

TSJ : Jesalmer のジャイナ教寺院 Jaina Jñāna Bhaṇḍāra (New Jeasalmer p. 160, No.377). 貝葉本, 16 × 2, 187 葉, 13 世紀後半の書写．

TSP : Pattan のジャイナ教寺院 Vāḍi Pārśvanātha Bhaṇḍāra (Pattan, Prastāvikam p. 42 ; GOS 本 (1st ed.), Foreword IX : Prastāvanā p. 68). V. S. 1492 (1435 A. D.) の書写．

TSP については 5 つの報告があるが，20 世紀に書写された 3 写本をのぞくと，

TSPJ : Jesalmer のジャイナ教寺院 Jaina Jñāna Bhaṇḍāra (New Jeasalmer p. 160, No.378). 貝葉本, 25 × 2, 313 葉, 13 世紀後半の書写．

TSPP : Pattan のジャイナ教寺院 Vāḍi Pārśvanātha Bhaṇḍāra, 写本情報は TSP と同じである．

すなわち，TS(P)J はおよそ 13 世紀，TS(P)P は 15 世紀の写本である．なお，Pattan 写本は Jesalmer 写本の書写であるとも考えられているが（BBS, amukham p. 26），詳細の検討は今後に委ねられている．

[2] GOS 本は E.Krishnamacharya が TS および TSP ともに Pattan 写本に基づいて校訂出版した．E. Krishnamacharya : *Tattvasaṃgraha of Śantarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla,* 2.vols., GOS XXX; XXXI, Baroda, 1926; repr. 1984; 1988.

一方，BBS 本は S. Dwarikadas Shastri が TS および TSP ともに Jesalmer 写本を底本に，Pattan 写本と GOS 本，及びチベット語訳を参照して改めて校訂出版した．S. Dwarikadas Shastri : *Tattvasaṃgraha of Ācārya Shāntarakṣita, with the Commentary 'Pañjikā' of Shrī Kamalaśīla* ,2 vols, Bauddha Bharati Series 1, Varanasi, 1968. 両校訂本および訳注研究等に関する情報の詳細は上掲塚本啓祥他 [1990: 451–457] 参照．

とが判明された．ただし，本稿は TS(P)B に対する修訂テキストの提示を目的とするため，TS(P)B のテキストを考え直す必要があると判断される箇所のみを列挙し，その根拠として両写本と他の参考文献を提示した．従って，以下の一覧表には TS(P)B 本の異読を明らかにするため，修訂テキストの左側に TS(P)B の text とその箇所（page, line）を，右側には両写本の読みとそれぞれの箇所（folio, side, line）を示した．さらに，参照（Reference）として TS(P)G，Tib 語訳，および必要に応じて『倶舎論』「破我品」等のテキスト情報を記した．

（*両写本いずれも，TS と TSP それぞれの写本（総計で 2 × 2 = 4 写本）を伝承しており，TS の location を示すときのみ TSJ , TSP との略号で注記する．一覧表の中の太線で囲った修訂については，後の「3. 考察」においてさらに考察を加える．なお，(4) に関して，本稿は結果として GOS と BBS 両校訂本と同一の読みを採用したが，この箇所は両写本の読みが異なり，詳細な議論が求められると判断されるため，例外ではあるが考察の対象とした．また (6) については，一覧表では便宜的に 2 つに分けたが，同一の引用文内であるため，同じ番号を付けて纏めて考察を加える．）

$TS(P)_B$		Emendation	$TS(P)_J/TS(P)_P$		Refference
page, line	text		folio, side, line	reading(s)	$TS(P)_G$/Tibet, etc
159.17	ātmānaṃ kalpayanti.	ātmānaṃ manyamānā api … ātmānaṃ kalpayanti.	61b3/ 107b7-8	ātmānaṃ manyamānā api … ātmānaṃ kalpayanti.	ātmānaṃ manyamānā api … ātmānaṃ kalpayanti.
150.18	vitathātmadṛṣṭim	vitathām ātmadṛṣṭim	61b4/ 107b8	vitathām ātmadṛṣṭim	vitathātmadṛṣṭim
159.21	ceṣṭāniṣṭasya ca	ceṣṭ〈asy〉āniṣṭasya ca	61b4/ 107b10	ceṣṭāniṣṭasya ca	
159.21	ºparityāgād aparaskandhāntaropādānāt	ºparityāgād aparaṃ skandhāntaropādānāt	61b4/ 107b10	ºparityāgād aparaṃ skandhāntaropādānāt	ºparityāgād aparaskandhāntaropādānāt
159.22	bhoktā	moktā	61b5/ 107b10	moktā	bhoktā / grol ba T
159.25	om.	hi	61b5/ 107b11	hi	om.
159. 25-26	tairthikaparikalpitāº	tīrthikaparikalpitāº	61b5-62a1/ 107b11-12	tīrthikaparikalpitāº/ tīrthikaparikarikalpitā	tairthikaparikalpitāº

159.26	kartṛtvabhoktṛtvādi	kartṛbhoktṛtvādi	62a1/ 107b12	kartṛbhoktṛtvādi	kartṛtvabhoktṛtvādi
160.2	°ānyatvād avācya°	°ānyatvādyavācya°	17a3(*TS J*)/ 7b9(*TS P*)	°ānyatvādyavācya°	°ānyatvād avācya°
160. 4	vastuto	vastuno	17a4(*TS J*)/ 7b10(*TS P*)	vastuno	vastuto
160.16	vastuvat	vastusan	62a3/ 107b16	vastusan / vastuvat	vastuvat / dngos por T
160.19	°ānupalabdheḥ	°ānupalabdhiḥ	62a3/ 107b17	°ānupalabdheḥ	°ānupalabdheḥ /
161.5	’nananya°	’nanya°	17a6(*TS J*)/ 7b12(*TS P*)	’nanya°	nanya°
161.6	skandho	skandhā	17a6(*TS J*)/ 7b12(*TS P*)	skandhā	skandho
161.9	yad etan neti niṣedhanam	yad etat tan neti niṣedhanam	62a5/ 108a4	yad etat tan neti niṣedhanam	yad etat tan niṣedhanam
161. 17	arthāntatvena	arthāntaratvena	62a7/ 108a8	arthāntaratvena	arthāntaratvena
162.1	°saṃślaṣo	°saṅgo hi	17a6(*TS J*)/ 7b13(*TS P*)	°saṅgo hi	°saṅgo hi
(1) 162.2	caiṣa	caivaṃ	17a6(*TS J*)/ 7b13(TSP)	caiṣa / caiva	caiva / de bzhin T
162.12	mūrttatvāmūrttatva-yukte	mūrtatvāmūrtatva-dharmayukte	62b1/ 108a12	mūrttatvāmūrttatva-dharmayukte / mūrttatvā-mūrttatvayukte	mūrttatvāmūrttatvayukte / lus can dang lus can ma yin pa’i chos ldan pa T
162.15	vedānā°	vedanā°	62b2/ 108a13-14	vedanā°	vedanā°
163.12	vastu svalakṣaṇaṃ	vastusvalakṣaṇaṃ	62b6/ 108b6	vastusvalakṣaṇaṃ	vastu svalakṣaṇaṃ

(2) 164.9	’vyākṛtam	vyākṛtam	63a2/ 108b13	vyākṛtam / ’vyākṛtam	’vyākṛtam / lung bstan par T
164.11	vyākriyate	vyākriyeta	63a2/ 108b14	vyākriyeta	vyākriyate
164.15	dṛṣṭidraṣṭravabhedaṃ	dṛṣṭidaṃṣṭrāvabhedaṃ	63a3/ 108b16	dṛṣṭidaṃṣṭrāvabhedaṃ	daṃṣṭridaṃṣṭrāva-bhedaṃ / dṛṣṭidaṃṣṭrā-vabhedaṃ (AKBh)
164.18	ºbhiyā	ºbhayān	63a4/ 108b17	ºbhayān	ºbhiyā
164. 20	upapādaka	upapāduka	63a4/ 109a1	upapād{{u}}aka / upapādaka *{{}} erased akṣara(s)	upapādaka / upapāduka (AKBh)
165.3	pudgalā	pudgala	63a5/ 109a4	pudgala	pudgala
(3) 165.6	ºbhūtāś ca yugapatº	ºbhūtā ayugapat	63a6/ 109a6	ºbhūtā ayugapatº/ ºbhūtāś ca yugapatº	ºbhūtāś ca yugapatº
(4) 165.11	ºābhidhānāt	ºābhidhānāt	63b2/ 109a8	ºābhimānāt / ºābhidhānāt	ºābhidhānāt
(5) 165.12	yo ’sāv āyuṣmann evaṃº	yo ’sāv āyuṣmān evaṃº	63b2/ 109a9	yo ’sāv āyuṣmann evaṃº	yo ’sāv āyuṣmann evaṃº/ yo ’sāv āyuṣmān evaṃº (AKBh)
165.16	pradarśanārtham	pradarśārtham	63b3/ 109a11	pradarśārtham	pradaśārtham
165. 16-17	bhārādīnām	bhārādānam	63b3/ 109a11	bhārādānam	bhārādīnām / khur len pa T
(6) 165.25	sāmānyenaiva	sāmānyam eva	63b4/ 109a15	sāmānyenaiva	sāmānyenaiva / sāmānyam eva (NV)

(6) 165. 25	naiva tvam asīti	nāhaṃ asmi naiva tvam asīti	63b4/ 109a15	naiva tvam asīti	naiva tvam asīti / nāhaṃ naiva tvam asīti (NV)
166.11	ātmaneti	ātmeti	63b4/ 109a17	ātmeti	ātmeti

3　考察

以下では「2. 修訂一覧」において TS(P)B に修訂を加えた箇所の中，特に議論が必要な部分について，関連文章を提示しながら検討したい．(異読の前に置かれた頁・行数字は TS(P)B の location を示す．)

(1) caiṣa → caivaṃ

viruddhadharmasaṅgo hi vastūnāṃ bheda ucyate /
skandhapudgalayoś caivaṃ vidyate bhinnatā na kim // (TS 344)
162. 2 caiṣa ; TSJ TSP caiṣa ; TSG caiva. Cf. Tib.: de bzhin (D 14b1).
「なぜなら，諸実在物は，矛盾した性質と結合するときに，相違するといわれるからである．そして同様に，五蘊とプドガラにはどうして相違性がないであろうか．」（下線筆者）

この箇所の Skt テキストには，TSJ TSP TSB：caiṣa と，TSG：caiva との二つの異読があり，一方また Tib 訳は de bzhin (*evam D14b1) である．

先ず，TSJ TSP TSB に見る caiṣa を採る場合，代名詞 eṣa (m. nom. sg) が何を指すかが問題になる．すなわち，k.344 cd には eṣa に相当する単語は存在せず，eṣa を独立した主語として読むことも難しい．

次に，TSG のテキスト：caiva の場合，副詞 eva は単に補足的（expletive）な用法と目され，「…そして，五蘊とプドガラにはどうして相違性がないであろうか．」と理解することになり，文法的にも意味上も問題はない．しかし，両写本をみるかぎり，いずれも va でなくṣa の文字（akṣara）であることは明瞭である．

これに対して，k.344 cd に対する Tib 語訳は phung po gang zag dag la yang// de bzhin ci'i phyir tha dad med// (D 14b1) とあり，下線部に caivaṃの読みを想定させる．このテキストに従えば，caivaṃ は k.344ab の議論をうけて「そして同様に，五蘊とプドガラにはどうして相違性がないであろうか．」と読ませることになり，文脈上も適切といえる．すなわち，前半偈で「相違性 (bheda, bhinnatā)」（ = 別異性 anyatva）の一般的な定義を示した上で，後半偈において，五蘊とプドガラの関係にも「同様に」適用される，という文脈を構成していることになる．それゆえ，この箇所は Tib 語訳に基づいて caivaṃを採用する．

(2) 'vyākṛtam → vyākṛtam

yadi hi pudgalo dharmī siddho bhavet, tadā tasya tattvānyatvādidharmo vyākṛtam arhet. yāvatā sa eva dharmī na siddhas, tat katham asatas tasya dharmo nirdiśyeta. (TSP ad TS 348)
164.9 'vyākṛtam ; TSPJ vyākṛtam；TSPP TSPG TSPB 'vyākṛtam.

「実に，もしもプドガラが性質主体として成立しているならば，その時には，そ [の性質主体 = プドガラ] が〔五蘊と〕同一か別異かなどの性質が答えられうるであろうが，ほかならぬその性質主体が成立していないかぎり，どうしてその非存在なもの（性質主体＝プドガラ）に〔同一や別異などの〕性質が示されえようか.」（下線筆者）

TS 336–337 によれば，プドガラ論者が主張するプドガラは，五蘊と同一である，あるいは別異である等と語られえない存在，である[3]．TS(P) はこのようなプドガラの定義に対して批判を加える．特にこの箇所においてカマラシーラは，もしもプドガラが性質をもつ主体（dharmin）であるならば，そのような性質主体は五蘊と「同一」であるか，あるいは「別異」であるなどと回答されうるであろうが（vyākṛtam arhet），プドガラが性質主体として成立しないかぎり，そのようなプドガラに同一や別異等の性質があるとは示されえない，と反論する．このような内容と文脈に従えば，この箇所は ’vyākṛtam ではなく vyākṛtam が妥当であると判断される．ちなみに Tib 語訳も gal te chos can gang zag grub par gyur na de’i tshe de’i chos de nyid dang gzhan nyid la sogs pa lung bstan par ’os na ji tsam du chos can de nyid ma grub na de ji ltar med pa de’i chos ston par ’gyur/ (D(p)224a1-2) とあり，vyākṛtam を支持する．

(3) ºbhūtāś ca yugapatº → ºbhūtā ayugapatº

tatra samānakālaḥ skandhā eva sāmastyena vivaksitāḥ samudāyavyapadeśabhājaḥ, ta eva hetuphalabhūtā ayugapatkālabhāvinaḥ santāna iti vyapadiśyante. (TSP ad 349)

165.6 ºbhūtāś ca yugapatº ; TSPJ ºbhūtā ayugapatº ; TSPP TSPG TSPB ºbhūtāś ca yugapatº. Cf. Tib.: cig car mi ’byung ba la (D(p) 224b3).

「その（第 349 偈の）中で，ほかならぬ同時の五蘊が全体として意図されるとき『集合体』の表現をもち，同じそれら（五蘊）が，原因・結果となって同時にはないとき，『［蘊］相続』と表現される.」（下線筆者）

ここは，同じ五蘊が，共時的な全体として捉えられるときには「集合体」(samudāya) と呼ばれ，これに対して，因果をもって連続するという通時的に観点から捉えられるときに「相続」(santāna) と名づけられることを説明しており，TSPJ の読みを採用するのが相応しい．チベット語訳の cig car mi ’byung ba la もまたこの読みを支持する．写本の伝承過程で a の文字が合成文字 śca と誤読されたと推察されよう．

(4) ºābhidhānāt

tatra ta eva skandhāḥ samudāyasantānādirūpeṇa vivakṣitāḥ pudgalo bhārahāra iti ca vyapadiśyante, tatraiva loke pudgalābhidhānāt. (TSP ad TS 349)

165.11 ºābhidhānāt ; TSPJ ºābhimānāt ; TSPP TSPB TSPG ºābhidhānāt

「その場合，その同じ〔五〕蘊は，集合体や相続などの形のものとして言及されるとき，「プドガラ（人）」と，また「荷物の担い手」と表示される．まさにそれ（集合体

[3] kecit tu saugatammanyā apy ātmānaṃ pracakṣate /
pudgalavyapadeśena tattvānyatvādivarjitam // (TS 336)
一方，ある人々は自分を仏教徒と考えながらも「プドガラ」の語をもって，〔五蘊と〕同一あるいは別異等を離れたアートマンを語る．

や相続などの形のものとしての五蘊）に対して世間では「プドガラ（人）」と語るからである.」（下線筆者）

まず，両写本の当該箇所の読みをみると，pudgalābhimānāt (TSPJ 63b2) および pudgalābhidhānāt (TSPP 109a8) とあり，明瞭に区別される．この場合 TSPP は，意図して°ābhidhānāt に書き直したと考えられる．

abhimāna に対する辞書的な意味づけは，“intention to injure, insidiousness; high opinion of one’s self, self-conceit . . .; conception (especially an erroneous one regarding oneself), etc.”(Monier-Williams) や，“(a) erroneous conception; (b) pride, arrogance; etc.” (*Critical Pāli Dictionary*) 等であり，周知のようにまた，煩悩の心所（心作用）である māna（慢心）の一つとして abbimāna はしばしば「増上慢」「憍慢」等と漢訳される．

一方の abhidhāna は，“telling, naming . . .; a name, title, appellation, expression, word; etc.” (Monier-Willoiams), “a name, appellation; . . . , etc.” (*Critical Pāli Dictionary*) など，「語ること」「名づけること」という行為をさす用例，あるいは「語」「名称」等の名詞としての用法が一般的である．

このように abhimāna と abhidhāna の意味上の相違は明瞭といえる．ちなみにこの箇所の Tib 語訳は rlom pa” (“to be proud of, to boast of, etc.”, Jäschke) であり，abhimāna を訳出したと推定される．

それゆえ，abhimāna であれば，当該箇所は「それ（集合体や相続などの形のものとしての五蘊）に対して世間では「プドガラ（人）」と誤って考えるからである.」あるいは「…と慢心するからである」といった意味をもつことになり，他方また，abhidhāna が本来であれば，当該箇所は，集合体や相続としての五蘊を「世間では「プドガラ（人）」と語るからである.」という趣旨となる．

この問題を考察するために，上記の注釈の対象となっている TS 349ab を見ると，

samudāyādicittena bhārahārādideśanā / (TS 349ab)

「荷物の担い手などの教説は，〔五蘊の〕集合体などの意図による.」

とある．この 349ab において「荷物の担い手」云々とは，五蘊を「荷物」に喩えるパーリ *Bhārahārasutta*（SN 22.25-6）［漢訳『重擔經』(『雑阿含』券三（七三）, 大正 vol.2, 19a-b)］の対応経典にシャーンラクシタが言及する箇所であり，TSP においてカマラシーラが注釈を加えている[4]．カマラシーラはこの経典の意味を，ブッダが五蘊の集合体を荷物の担い手としてのプドガラ（人）と喩説するもの[5]，と解釈した後，『人契経』(**Mānuṣyakasūtra*,

[4] bhāraṃ vo bhikṣavo deśayiṣyāmi, bhārādānaṃ bhāranikṣepaṃ bhārahāraṃ ca. tatra bhāraḥ pancopādānaskandhāḥ, bhārādānaṃ tṛṣṇā, bhāranikṣepo mokṣaḥ, bhārahāraḥ pudgala iti.（TSPB 165.1-4）

「また，比丘達よ，私は荷物と，荷物を受け取ることと，荷物を捨てることと，荷物の担い手とを説示しよう．この説示において荷物とは五取蘊であり，荷物を受け取ることとは渇愛であり，荷物を捨てることとは解脱であり，荷物の担い手とはプドガラ（人）である.」

この経典はプドガラ論者がプドガラの存在を主張するために頻繁に引用する経証であり，プドガラ説を伝える他の文献にもみられる．村上 [1993b: 註 53] 参照.

[5] samudāyādicittena samudāyādyabhiprāyeṇa bhārahārādideśanā, na virudhyata iti śeṣaḥ. (TSPB 165. 8-9)

「『集合体などの意図による』，すなわち集合体などの概念によって『荷物の担い手などの教説』は

『雑阿含』券一三（三〇六），大正 vol.2, 87c-88a）の一部分を引用し，プドガラは仮説としての存在（仮有 prajñaptisat）であることを主張する[6]．

このように TS 349ab とその註釈には二つの経典が言及ないし引用されていることからも，abhimāna と abhidhāna のいずれの語を選択するかを考察する際には，これらの経典がいかに解釈されたのかを検討する必要がある．従って，ここではこれらの経典の解釈と関連して『倶舎論』第 9「アートマン論否定」章（破我品）を参考にしたい．なぜなら TS(P) におけるプドガラ説批判は『倶舎論』「破我品」と密接な関係があると考えられ[7]，また今 TS(P) が引用した二つの経典は「破我品」にもみられ，同様の趣旨でより詳細に論及されているからである．

TSP に引用された『人契経』の箇所をほぼ同様に引用する「破我品」の議論は，以下のとおりである．

… atrāyaṃ vyavahāra ity api sa āyuṣmān evaṃnāmā evaṃjātya evaṃgotra evamāhāra evaṃsukhaduḥkhapratisaṃvedi evaṃdīrghāyur evaṃcirasthitika evamāyuḥparyanta iti / iti hi bhikṣavaḥ saṃjñāmātrakam evaitat pratijñāmātrakam evaitad vyavahāramātrakam evaitat / (AKBh IX [LEEed]: 70.1-4)

「…これについては，以下のような言語表現もある．『この長老はこのような名前をもち，このような生まれをもち，このような種性をもち，このような食をとり，このような苦楽を感受する者であり，このように長い寿命をもち，このように長く住み，このような寿命でおわる．』と．比丘たちよ．実にこれは単なる名称にすぎず，これは単なる言明にすぎず，これは単なる言語表現にすぎない．」（下線筆者）

このように，「破我品」でヴァスバンドゥは，そこに引用する『人契経』がプドガラ（人）を「単なる言語表現」（vyavahāramātraka），「単なる名称」（saṃjñāmātraka），「単なる言明」（pratijñāmātraka）にすぎないことを明示している．すなわち，プドガラ（人）は五蘊とは別に実在するものではなく，経典もまた，世間の言語表現に従った一般的な呼称としてのみプドガラ（人）を認めるにすぎないというのである．

以上のような「破我品」におけるヴァスバンドゥの理解は，TS(P) においても共通すると考えられる．それゆえ，以上のような文脈を考慮に入れるとき，「世間では『プドガラ（人）』と語るからである．」という理解が相応しく，ここは TSPJ の読み abhimāna でなく，

あるのであり，〔この偈の文章には〕『〔荷物の担い手がプドガラであるという教説自体は〕矛盾していない．』という補足がある．」

[6] ata eva bhagavatā bhārahāraḥ katamaḥ pudgala ity uktvā — yo 'sāv āyuṣmann（āyuṣmān：AKBh）evaṃnāmā, evaṃjātiḥ, evaṃgotraḥ, evamāhāraḥ, evaṃ sukhaduḥkhaṃ pratisaṃvedī, evaṃ dīrghāyur ityādinā pudgalo vyākhyātaḥ. sa evaṃ skandhasamudāyalakṣaṇaḥ prajñaptisan yathā vijñāyeta nānyo nityo dravyasan para parikalpito vijñāyeteti pradarśanārtham. (TSPB 165.11-16)

「そしてブッダは，何がプドガラであり，何が荷物の担い手であるのか，とお説きになった後，『長老よ，かれは（/この長老は AKBh）このような名前をもち，このような生まれをもち，このような種姓をもち，このような食をとり，このような苦楽を感受する者であり，このように長い寿命をもつ』云々とプドガラを説明された．このように，それ（プドガラ）は，蘊の集合を特徴とする仮説としての存在（仮説有）であると，あるがままに認識されるべきであって，他学派の人々が構想分別する常住な，他の実体としての存在であると認識されるべきではない，ということを示すために〔ブッダは上記のように説明されたの〕である．」（下線筆者）

[7] 内藤 [1984] は関連各所において TS(P) と「破我品」との密接な関係に言及する．

TSPP が伝承する abhidhāna の読みを採用するのが適切であると考えられる．

(5) yo ’sāv āyuṣmann evaṃº → yo ’sāv āyuṣmān evaṃº

yo ’sāv āyuṣmān evaṃnāmā, evaṃjātiḥ, evaṃgotraḥ, evamāhāraḥ, evaṃsukhaduḥkhaṃ pratisaṃvedī, evaṃdīrghāyur ityādinā pudgalo vyākhyātaḥ/(TSP ad TS 349)

165.12 yo ’sāv āyuṣmann evaṃº；TSPJ TSPP TSPB TSPG yo ’sāv āyuṣmann evaṃº.

「『この長老はこのような名前をもち，このような生まれをもち，このような種姓をもち，このような食をもち，このような苦楽を感受する者であり，このように長い寿命をもつ』」云々とプドガラが説明された．」（下線筆者）

この一文は前節でみたように，『人契経』の一部の引用である．下線部は，両写本および TSPB と TSPG のいずれの校訂本も呼格形の āyuṣman の読みを提供するが，AKBh (IX 70.1) および AKVy (IX 706.10) のいずれも主格形の āyuṣmān であり，パーリ対応経（SN XXII.22 Bhāram (荷物), III, 25.25）の āyasmā もまた，諸比丘に呼びかける世尊の説明の中での表現であり，呼格でなく主格としての用例であることは明らかである．それゆえ，この箇所は，『倶舎論』他も引用する経典内の表現に照らして，主格形の āyuṣmān と修訂した読みを採用する．

(6) sāmānyenaiva . . . naiva tvam asīti → sāmānyam eva . . . nāham asmi naiva tvam asīti

ātmānaṃ cānabhyupagacchatā sāmānyam eva pratiṣeddhavyam, nāham asmi naiva tvam asīti/ (TSP ad TS 349)

165. 25 TSPJ TSPP TSPB TSPG : . . . sāmānyenaiva . . . naiva tvam asīti/

「しかし，アートマン〔の存在そのもの〕を認めない人（＝仏教徒）は，『私は存在しない，汝は決して存在しない』と言って，ほかならぬ普遍〔としてのアートマン〕を否定するはずである．」（下線筆者）

この箇所は，内藤 [1985] も指摘するように，『ニヤーヤヴァールッティカ』：ātmānaṃ cānabhyupagacchatā sāmānyam eva pratiṣeddhavyam, nāham naiva tvam asīti. (NV 321.13-14; 下線筆者) からの引用と考えられる．ただし，TSPJ TSPP TSPG TSPB いずれも . . . sāmānyenaiva . . . naiva tvam asīti/という読みを伝え，これに従えば，訳文は「しかし，アートマン［の存在そのもの］を認めない人（＝仏教徒）は，『汝は決して存在しない』と言って，ほかならぬ普遍として［アートマンを］否定するはずである．」となる．結果として，「私は存在しない」の一文が欠落するばかりでなく，pratiṣeddhavyam の文法上の主語を欠くことになる．

これに対して，Tib 語訳は aham と tvam の訳順と一部の訳 (ma yin pa) に問題を残すものの，khyod nyid dang — bdag nyid ni ma yin pa’i phyir . . . (D(p) 225a3) とあり，少なくとも依拠した写本には nāham [asmi] の読みがあったと推測される．

まず，sāmānyam eva については，文脈上も文法的にも NV テキストが適当と判断されよう．一方また，TSPJ TSPP TSPG TSPB のいずれも nāham を欠いている．しかしながら，この箇所は，直前の経典引用（= AKBh, IX, 58.5–6, SN III, 21.26–27）に照らしても nāham の補訂が期待され，さらにアートマンそのものの存在を否定する仏教徒を批判するという文脈を考慮するとき，nāham asmi という明示的な表現の補足がより相応しいと考

えられよう.

以上，紙幅の制約により，前節で挙げた「修訂一覧」のすべてを詳論することは叶わなかったが，ここでは，その中の重要と目される 6 箇所について，Jesalmer（TS(P)J）および Pattan（TS(P)P）の総計 4 写本，TS(P)G，チベット語訳，ならびに関連する諸文献を素材として，TS(P)B を修訂する根拠を提示し，詳説した.

本修訂および考察により，後期中観派を代表するシャンータラクシタとカマラシーラ師弟による冒頭にふれたようなプドガラ説批判の論旨が，より明確な形で理解されうるとすれば，本稿の目的は果たされている.

〈略号および使用テキスト〉

AKBh IX［LEEed］ *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, chapter IX: Ātmavādapratiṣedha*, with critical notes by the late Prof. Yasunori Ejima (江島惠教), ed. Jong Cheol LEE (李鍾徹), Bibliotheca Indologica et Buddhologica 11, Tokyo: Sankibo Press, 2005.

AKVy *Sphuṭārthā Abhidarmakośavyākhyā: The Work of Yaśomitra*, ed. U. Wogihara, Tokyo: Publishing Association of Abhidharmakośabhāvyākhyā, 1932-1936.

D Tattvasaṃgraha, Tib.: Toh No.4266.

D(p) Tattvasaṃgrahapañjikā, Tib.: Toh No.4267.

NV *Nyāyabhāṣyavārttika of Bhāradvāja Uddyotakara*, ed. Anantalal Thakur, Nyāyacaturgranthikā Vol.II, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1997.

SN *Saṃyutta Nikāya* (Pāli Text Series)

TSJ Jesalmer manuscript of TS(P). Jesalmer Cat. No. 377 (TS), No. 378 (TSP).

TSp Pāṭaṇa manuscript of TS(P). Pāṭaṇa Cat. No. 6679 (TS), No. 6680 (TSP).

TS(P)G *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita, with the Commentary of Kamalaśīla*, 2 vols., GOS XXX;XXXI, ed. E. Krishnamacharya, Baroda: Oriental Institute, 1926.

TS(P)B *Tattvasaṃgraha of ācārya Shāntarakṣita, with the Commentary 'Pañjikā' of Shrī Kamalaśīla*, 2 vols, Bauddha Bharati Series 1, ed. S. Dwarikadas Shastri, Varanasi: Bauddha Bharati, 1968.

(参考文献)

Jha, Ganganatha

［1937］ *The Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita : with the commentary of Kamalaśīla*, 2vol., GOS LXXX; LXXXIII, Baroda, repr. Delhi 1986.

Schayer, *Stanislaw*

［1932］ "Kamalaśīla's Kritik des Pudgalavāda," *Rocznik Orientalistyczny* VIII, Lwów (M. Mejor(ed.): *Stanislaw Schayer, On Philosophizing of the Hindus, Selected Papers,* Warsaw 1988, 再録).

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文

［1990］『梵語仏典の研究』III（論書篇）平楽寺書店.
内藤昭文　［1984］「TSP におけるアートマン説批判 (II)-プドガラ説をめぐって－ (1)」『印度学仏教学研究』33-1, 140–141.
［1985］「TSP におけるアートマン説批判 (II)-プドガラ説をめぐって－ (2)」『佛教學研究』41, 20–51.
長澤實導　［1939］「『ダットヴァサングラハ』に於ける補特伽羅説の批判」『仏教研究』3-3, 69–81 (長澤實導 『瑜伽行思想と密教の研究』大東出版社, 1978, 191–205 再録).
村上真完　［1993a］「人格主体論（霊魂論）－『倶舎論』破我品訳註（一）－」『塚本啓祥教授還暦記念論文集：知の邂逅―仏教と科学』佼成出版社, 271–292.
［1993b］「人格主体論（霊魂論）－『倶舎論』破我品訳註（二）－」『渡辺文麿博士追悼記念論集：原始仏教と大乗仏教』下，永田文昌堂, 99–140.

〈Keywords〉　*Tattvasaṃgraha(-pañjikā)*, pudgala, Jesalmer, Pattan

ちょん　さんぎょ　　東京大学大学院博士課程

Text critical Notes on the *Tattvasaṃgraha(pañjikā)*, Chapter 7, Section 6 Titled "Examination of Self (*Ātman*) as Imagined by the Vātsīputrīya School": Amendments to the Bauddha Bharati Edition

JEONG, SangKyo

The *Tattvasaṃgraha* (TS) written by Śāntarakṣita (ca.725–784) and its commentary, the *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) by Kamalaśīla (ca. 740–797), criticized different types of *ātma-vāda* or "the doctrine of Self" advocated by the current Indian philosophical thinkers. The 6th Section of the TSP, kk.336–349, of Chapter 7 deals with the *pudgala* theory propounded by the Vātsīputrīya, one of the most influential Buddhist schools in India.

Two Sanskrit manuscripts of both TS and TSP are extant at Jaina temples in Jesalmer (TS(P)J) and Pattan (TS(P)P) in India (totally 2×2=4 mss.). There have so far been published two critical editions, i.e., one by E. Krishnamacharya included in Gaekwad's Oriental Series (GOS) which was published in 1926 on the basis of TS(P)P, and another edition by S. Dwarikadas Shastri which appeared in Bauddha Bharati Series (BBS) in 1968 on the basis of TS(P)J, while occasionally referring to TS(P)P as well as the above GOS edition and Tibetan translation.

With the generous assistance of Dr. Hisataka Ishida, I was able to gain access to the clear photos of both TS(P)J and TS(P)P, which allowed me to critically analyze the text of the above-mentioned Section 6 of TS(P)J and TS(P)P.

Judging from the critical edition prepared by the author, as well as its diplomatic edition based on TS(P)J, TS(P)P and Tibetan translation of the Section 6, it is possible to suggest approximately seventy readings different from both texts of Krishnamacharya (GOS) and Dwarikadas Shastri's (BBS).

Since Dwarikadas Shastri's edition (BBS) is the latest one, this article compares significant readings with those found mainly in that edition. Due to the restriction of pages, the present author confines himself to several important readings which this paper proposes differently from both GOS and BBS editions.

After the Introduction, this article proposes new readings in a table. The table first shows the text by Dwarikadas Shastri (BBS), and then offers new proposed readings, those readings found in TS(P)J and TS(P)P, and other references, i.e., the text by Krishnamacharya (GOS) and Tibetan translation, etc. After providing the table, the following sections of this article discuss in detail some of the important readings with relevant materials.

Indeed, there have been published a few remarkable translations of Section 6 titled Vātsīputrīyaparikalpitātmaparīkṣā. However, some of them whose renderings were based only on either GOS or BBS edition could not escape from misunderstandings partly because of their inaccessibility to the original manuscripts. In this respect, the present paper may hopefully overcome, many, if not all, of the hitherto unsolved questions in that Section from a textual viewpoint.